

誇り高き血族

物語の魔法使い

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一応原作の雰囲気壊したくないとは思っていますが、話の都合や設定上かなりサイヤ人のこととかで捏造しています。

かなり自己解釈も入っています。

オリキャラも大人数です。

まずこの時点で駄目な人は読まないでいただけると嬉しいです。

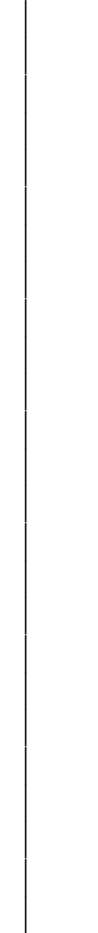
時間軸としてはブウ編より一年後。

映画やテレビスペシャル、アニメの話はなかったことになっていますが、新キャラとしてこれらのキャラが出てくることはあります。

でもドラゴンボールの設定は微妙に採用しています。

目次

第1話



1

第2話



13

第1話

「これからそなた達がどこで生き、どこで死のうと、自分達がサイヤ人の戦士であること、王家の血をひいていること、その誇りをけっして忘れるでないぞ」

ベジータが母からそう告げられたのはいつだったのだろうか。確か、初陣の直前だったような気がする。

もう数十年前のこと、時期すら曖昧にもかかわらず、その言葉と真剣な母の顔だけは鮮やかに記憶に焼き付いてた。

母は美しい女だった。

濡れ羽色の髪に、透き通るように白い肌。

華美なほどに整った顔立ちに、均整のとれた長身。

高貴な血筋に見合った高い戦闘力と非常に優れた頭脳を持つ戦士であり、誰よりも戦闘民族であることを誇りに思っていた。

今思い返せば母は遠くない未来、サイヤ人がフリーザに滅ぼされることを悟っていたのだろう。

そしてその時、自分の子らがどれほどの地獄に置かれるのかも。

だから言葉を贈った。

子らが忘れないと確信して。

現にベジータは忘れなかった。

星が消滅し、様々な物を奪われ、蹂躪されても、けっして忘れなかった。

※※※※※

「もきゅめんたりー?」

数人の友達を伴って訪ねてきた高校生の甥っ子に、ラディッツは不思議そうに聞き返す。

甥っ子が訪ねてくること自体は別に珍しくもないし、週に一度はラ

ドイツが自作の野菜などを届けに行っているので久しぶりというわけでもない。

だが、こうして身内以外の人間を複数連れてきたのは初めてだった。

全員悟飯の高校の同級生。

シャプナー、イレイザ、ビーデル。

あの魔人ブウ戦の後紹介されたため、一応面識のある面々だ。

今回は何か知らないが、高校で出た課題を共同で行うのだと言う。

が、ラドイツはサイヤ人だ。

というか生粋の宇宙人だ。

同胞のベジータなどは、趣味が読書であるくらいだからこちらの文字をすっかり覚えているのだろうが、自分はすでに滅びた母星の科学の力によって地球で使われている言語が話せるだけで、読み書きはそこまで得意ではない。

時々近くの町の飲み屋でたちの悪い酔っ払いを追い払う仕事をしたり、自分で作った野菜を農協に卸したりしているので、生活に不自由なくらいには覚えたがその程度だ。

そんな自分が現役高校生（しかも悟飯は学校一の秀才だという）に協力できることなどあるのだろうか。

素直にそう口にすれば、甥っ子は『もきゆめんたりー』を作るのに協力してほしいというのだ。

そもそもその単語自体に聞き覚えがない。

何をどうすればいいのかさっぱりわからないまま、どこか緊張している様子の悟飯とその友達にブランデー入りのホットミルクと自家製の菓子を出してやりながら、自分も椅子に腰かける。

すると待ち構えていた末っ子のビーツが父の膝に乗って来た。

地球でラドイツは弟と同じように結婚して、三人の子供をもうけた。

上ふたりが女の子で下が男の子。

それぞれユキ、サクラ、ビーツと名付けた。

上ふたりが母親と北の都へ買い物に行っているため、留守番をして

いるのはこの子だけだ。

「悟飯お兄ちゃん」

ビーツが少しはにかんだ様子で従兄に笑いかけると、悟飯も笑顔で返す。

「可愛いー！ぼうや、いくつ？」

金髪ショートヘアのイレイザが問えば、ビーツは誇らしげに掌を見せた。

「へえ、五つなんだあ」

「悟飯の従弟かあ。確かになんとなく似てるな」

室内の空気が一気に弛緩する。

毛髪量が多いビーツの頭を撫でてやりながら、ラディッツは悟飯に問いを重ねた。

「それで・・もきゆめんたりーっていうと・・なんだ。ドキュメンタリーと似たような感じか？」

「あ、はい。創作のドキュメンタリーというか、要するに本当にあったように作ったドラマのことです」

淹れてもらったミルクを一口飲んでからオレンジスターハイスクーラーの秀才は頷く。

「学校の授業にメディア論というのがありますが、その課題でチームを作って映像作品を作るんです。それで、その」

少し言いづらそうに口ごもった後、意を決したように顔を上げた。
「サイヤ人のことを教えてほしいんです」

「?!」

予想外の発言にラディッツはぎよつと目を見開いて甥を見る。
悟飯の方はどこか必死さすら滲ませて言葉を重ねた。

「だ、駄目ですか？」

「い、いや。駄目っていうか」

ラディッツは困ったように甥の友人達を見る。

それは、彼らがどこまでの事情を知っているのか測るためためだった。

サイヤ人は宇宙人だ。

だが、辺境の辺境であり他星との交易がない地球ではそんなこと言ったら頭がおかしいと思われる。

地球育ちの実弟よりも地球の常識に詳しい兄はそのあたりのことです。甥が変な目で見られないか心配したのだが、甥の彼女が慌てて首を振った。

「あ、ラディッツさん。私達は全員事情知ってるので」

「空飛んだりしてるの何回も見せられれば納得もしますよ」

そう言葉を引き取ったのは金の長い髪の青年「シャプナー」。

ラディッツは逞しい肩を竦めて曖昧な笑みを浮かべる。

「あー、別にサイヤ人だから空飛べるとかじゃないんだけど。・・・うん、まあ。知ってるなら話すのは良いぜ？別に隠す内容でもねえし。というか、さつき言ってた架空のドキュメンタリーってことで発表する内容がそれか」

「・・・はい」

「でもなんで今更そんなことを？お前は地球産まれ地球育ちだし、戦うの好きじゃねえんだろう？なら別に知る必要もないと思うけどな」

故郷への想いが無いと言えば嘘になる。

たった八年間ではあったが、ラディッツは確かに惑星ベジータについて、あそこにはたくさんの仲間がいた。

両親がいた。友達がいた。

だが、もう純血は自分を含めて三人だけ。

それぞれ地球で家庭を持ち、暮らしている。

全宇宙最強と謳われた強戦士族サイヤは滅んだのだ。

後はこの小さな辺境の星で細々と血を紡ぐのみ。

昔はそれが苦しくて仕方がなかったが、実際の傷と一緒に痛みにも慣れてくる。

終わったことを考えても仕方がない。

どうせ裁きは死んだ後に受けるのだ。

今は守りたいものを守るだけである。

ラディッツが浮べた笑みの苦さに気付いたのだろう。

悟飯は僅かに苦笑めいた顔をして言った。

「それ、ベジータさんも同じこと言ってます」

「ていうかベジータにもう取材済みか」

「あ、いえ。何も教えてくれなかったので済んだわけでは」

「まあ、あいつならそうだろうな。あいつ思い出話とか苦手だし」

ベジータは頭が良くて真面目だが、そのせいか情緒的なことが妙に不器用だ。

興味がないどうでも良いと言いつつも、彼はけっして故郷や同胞達を忘れたことはないだろう。

あれから数十年経過しても、いまだに整理できないほど強く思っているに違いない。

適当にやるということが出来ないのは地味に不便だと思うが、ベジータの真面目さは憧れでもあるので、今まで何も言ったことはないが。

ラディッツは自分ゆずりの息子の髪をわしゃわしゃとかき混ぜて、甥に再度問いかけた。

「で？まだ聞いてないぜ？なんで今更とうの昔に滅びた民族の話聞きたくなったんだ？」

「……何も知らないことに気付いたからです」

促せばおぼろげと話し始める。

実を言うと昔からサイヤ人のことを知りたいとは思っていたという。

だが、聞きやすい父親は赤子の時に地球にきたため記憶がない。

他のふたりに聞こうにも、星が滅びていることを考えると聞きづらい。

そんなこんなが現在まで続いていたが、今回の授業課題を聞いた時、真つ先に浮かんだのが自分の血のことだった。

悟飯は戦うのが嫌いだ、それでも敵に勝利した時などに気持ちよさを感じたことはある。

強くなれたことに喜びを感じたこともある。

多分それがおそらくサイヤ人の血なのだろう。

強さを求め、戦いを好む一族。

本当にそれくらいしか知らないことに気付いたのだ。

「・・・良い機会だと思ったんです。僕は半分地球人ですけど、半分サイヤ人でもあります。確かに惑星ベジータはもうありませんが、せめてそこがどんな場所で、僕はどんな民族の血を継いでいるのか知りたい。発表する時は架空ということになってしまいますけど、これを機にきちんと向き合ってみたいんです」

優しい気な目元を引き締めて、悟飯は語った。

「・・・なるほどね。まあ・・・別に良いぜ。大したことは言えないけどな。俺もそんな長いこといたわけでもねえし」

僅かに逡巡した後、頷いた叔父に、悟飯の顔がはつきりと明るくなった。

「あ、ありがとうございます！ラディッツおじさん！助かります！」

周囲にいた友人達も良かったよかったと胸を撫でおろしている。

そんな大袈裟なと思ったが、考えてもみれば、他ふたりが駄目で、最後のひとりだったのだからラディッツが答えないと企画自体が破たんしてしまう。

「・・・地味に大役だな」

ラディッツは慣れない展開に、弟そっくりの困り顔でぽりぽりと頬を搔いた。

どこからというより、何を話せば良いのかと眉を寄せると、

「!?!」

叔父と甥の顔が同時に跳ね上がる。

その双方の目は天井、正確にはさらに上である空の向こうへ向けられていた。

「ど、どうしたの二人とも」

「お父ちゃん？」

ビーデルやビーツが心配そうな声をあげるが、ふたりはそれには答えない。

ラディッツは元々鋭い双眸をさらに研いで声を低める。

「宇宙から気が近づいてきてるな。数が多い。50はいるぞ」

「結構大きいですね。なんか嫌な感じですよ」

大きいと言っても一番大きな気でさえ、ラディッツよりもかなり下だ。

しかし、彼らの基準では脅威に入らなくても、平均戦闘力が一桁程度である地球人にとつては十分すぎる脅威である。

全体的に邪悪さを感じるところをみると、辺境にバカンスに来たということも考えづらい。

ラディッツはおろおろと父と従兄の顔を見比べるビーツをそつと床に下して、重々しく溜息をついた。

「悟飯。とりあえず行くぞ。どこの誰だろうが、暴れられたら面倒だ。……あ、ベジータとカカロットはもう動いたな」

「ピッコロさんも向かったみたいですね。チビ達も一緒か」

「あー。悪い、嬢ちゃん達。急用が出来ちまった。多分そんなに長いかからないと思うが、うちの女房帰ってくるまでちよつと留守番してくれねえか？ 冷蔵庫の中身は好きに食べていいから」

「あ、はい。それは大丈夫ですけど……」

ビードルは交わされる会話の意味はなんとなくわかってても、現状の完全な把握までは至らないのだろう。

しかし、やや緊迫した状況であるということとはわかっているので、問い詰めたりはしない。

彼女以外の地球人達は何故先ほどまでの穏やかな空気が消えたのかわからず、置いてきぼり状態だ。

悟飯は彼らにどう説明するかと考えたが、良い説明が思いつかなかったので、心苦しいが現在交際中の彼女に丸投げすることにし、不安そうに自分を見上げてくる小さな従弟に声をかける。

「ビーツ。お父さんと僕はちよつと出かけてくる。お姉ちゃん達と仲良くお留守番してくれるかい？」

「うん！お父ちゃん、悟飯お兄ちゃんいつてらっしやい」

「いつてきます」

首がとれそうなくらいの勢いで頷くビーツの頭を軽く撫でてやっ
てから、悟飯はラディッツの家を飛び出す。

家主もそれに続き、あつという間に見えなくなった。

悟空を筆頭に、クリリンや天津飯といったいつものメンバーが着陸予測地点の荒野に集合した。

宇宙から来た連中で脅威でなかった者は知る限りいないと言つていい。

かつてフリーザの襲来を待ち受けた時のような緊張感こそないが、それでも油断してはいけないことぐらい骨身にしみてわかっている。そして、待つこと数分。

皆が見守る中 地面に大穴を空けたのは見覚えのある丸型だった。フリーザ軍の一人乗りポッド。

しかしこの場の多くの人間が見たことがあるものとは少しデザインが違う。

「妙だな」

上からそれを観察したベジータがぼつりと呟く。

「妙?」

「新しいのにデザインが古い。俺が最後に使っていた奴よりも4世代は前のものだ」

ピッコロの問いに端的に答えると、さつさと穴を滑り降りようとする。

その時だった。

宇宙船の扉が弾けるように開くと、中から小さな影が飛び出し、いきなり無数のエネルギー弾を放つたのだ。

幸いにも誰にも当たらずに済んだが、周囲の岩壁は盛大に破壊され、出来た大穴が全て埋まってしまうほどだった。

「わわっ!」

「あぶねっ!」

ヤムチャやクリリンが当たりそうになって慌てるが、ピッコロなどは攻撃してきた相手に驚く。

「子供!」

そう出てきたのはせいぜい10歳くらいの子供だったのだ。

だが、その状態は悲惨の一言に尽きた。

着ている服はおそらく元はベジータが着ていたような戦闘服だったのだろうが、今は血と泥でまみれズタズタに裂かれている。

おそらく骨折しているのだろう。

左手が関節とは逆にひしゃげ、まだまだ丸みがある肩や太ももには痛々しい裂傷が走っている。

顔は血まみれで元の肌の色すらわからず、唯一血に染まらない目は焦点が定まらず見えているのかも怪しいがひどく殺気に満ちていた。

「お、おい。落ち着けて」

あまりに凄惨な状態に悟空ですら顔を険しくして、手負いの獣のような子供に手を貸そうとするが返事は気功波で返される。

さらには容赦ない蹴りなどが飛んできて、地球の戦士達は困惑した。

襲い掛かってくる動作は重傷者とは思えないほど機敏で、驚くほど正確だ。

しかし、容赦なく流れ落ちる血液量から考えてこのまま動き回らせると死んでしまうだろう。

だが手当をしようにもこの子は極度の興奮状態であるため、こちらの言葉が届いていない。

悟飯は怪我を覚悟で荒れ狂う子供を抱きこむ形で止めようとしたが、それとほぼ同時に急に空が暗くなった。

一瞬誰かが神龍を呼び出したのかと思ったが、見上げてすぐに違っていると気づく。

それは巨大な宇宙船だ。

こちらも形状としてはフリーザ軍のそれに近いが、デザインはかなり異なる。

目の前で暴れている子供のインパクトが強すぎて忘れていたが、あれが地球の戦士達が感知した多数の戦闘力の正体に違いなかった。

「■■■■e!!」

皆の目が空に向いた隙を逃さなかった小さな戦士は何語かわから

ない言語を叫び、悟飯の腕から無理矢理脱出すると躊躇なく宇宙船に向かつて気功波を放った。

その一撃は船を破碎するまでは至らなかったが、その装甲を貫通し爆発を起こす。

「待って!!」

標的を宇宙船に変えた子供を悟飯が慌てて追いかけて、他の面々もそれに続く。

だがこの場で困惑の種類が違う人間がふたりいた。

ベジータとラディッツだ。

ふたりは飛び去る子供を見つめ、

「なあ、ベジータ。・・・あいつ」

「言いたいことはわかる。間違いないだろうな」

「でもよ・・・」

「それもわかってている。計算が合わん。まあ、そんなことは当人の口から聞けばいい。それより」

ベジータは先程の気功波で埋まった「いや、埋められた大穴を顎で指して言った。

「この下にいる奴を急いでポッドごと掘り返してブルマのところにも連れていけ。生命維持装置を使ってるようだが念のためだ。もうひとり回収したらカカロットに瞬間移動させる」

「!わかった!」

ラディッツは積み上げられた瓦礫を手早く消滅させながら、驚くほどの速度で掘り出しにかかる。

それを視界の端に映し、ベジータは爆発する宇宙船から飛び出してきた気を全て把握しながら皆の後を追った。

「■■■■ a A ■■■ a a A a a ■■■ a a !!」

瀕死の戦士は荒々しい咆哮に、大型宇宙船からわらわらと出てきた異星人のひよりは舌打ちした。

出身の星が違うのか、人種は多種多様でそれもフリーザ軍を想わせる。

装備はばらばらだが、フリーザ軍のそれと似たようなものを身につけている者もいた。

どう見ても友好のため来たようには見えないし、重症の子供を見て忌々しそうに舌打ちをする奴が善人なはずもない。

数としては明らかに不利だったが、宇宙からきた幼い戦士は果敢に挑みかかっていた。

状況を見る限りあの子とあいつらは敵対関係にあるらしい。

こちらから真つ先に加勢に入ったのはトランクスと悟天だった。

年が近い子供がひとりで戦っているのを見て放っておけなかったのだろう。

ちなみに他の大人が遊んでいたわけではなく、すぐに大怪我の子供を殺そうとする外道の駆逐にかかった。

数こそ多いが別段強いわけでもない。

乙戦士達に軽くひねられる形で、どんどん数が減っていく。

「なんで地球人がこのガキの味方するんだよ!？」

激滅した侵略者?のひとりが地球と同じ標準語でそう叫ぶ。

あまりに今更な問いだが、おそらく事態を飲み込むのに時間がなかったのだろう。

しかし、現状を完全に理解しきる前に、その頭はベジータにかち割られる。

「貴様らは傭兵だろう?いくらで雇われたかは知らんが下手を打ったな」

その時フリーザ軍のプロテクターを身につけたひとりが声を上げる。

「お前、ベジータか!？」

「馴れ馴れしく呼ぶな。俺は貴様など知らん」

おそらくは軍時代の顔見知りだったのだろうが、ベジータは全く記憶にない。

だが、相手は違うらしく慌てて弁明してきた。

「待ってくれ、お前が生きてるとは思わなくて」

「待ってどうなる?尻尾を丸めて逃げかえるか?傭兵としてはもう稼

げなくなるな」

「ぐぐぐ」

傭兵は金でいくらでも雇い主を鞍替えすると勘違いされやすいが、実際は逆で一度でも雇い主を裏切ると仕事が来なくなる。

どんな契約を結んだかは知らないが、こいつらは失業か死かの二択を迫られているのだ。

おそらくフリーザ軍が実質崩壊してから傭兵に崩れたのだろうか、運が悪い話である。

「逃げるならわざわざ追わんぞ?・・・まあ、もう必要あるまい」
「え」

ベジータの言葉の意味を理解する間もなく、男の言葉は途切れる。

背後から抹殺対象者が手刀で首を刎ねたからだ。

「死ねば失業の心配はなくなるな」

面白くもなさそうに地面に頽れた死体を見やった後、よろめいて片膝をついた血まみれの子供と正面から向き合った。

「■■■■。■■■■。o■■■■a?」

「!?!」

ベジータの喉から零れた地球のそれとは明らかに異なる音に、子供はぎよつと顔を上げる。

大きな目が零れ落ちそうなほど開き、眼前の人物をまじまじと見つめた。

その反応を確認し、サイヤ人の王子はさらに続ける。

「■■■■。o■■■■。a。■■■■。■■■■。o■■■■。a」

「.....a a。■■■■」

傷付いた子供は救われたような笑みを浮かべ、力尽きるように昏倒した。

第2話

全身に無数の裂傷、打撲、骨折。
カプセルコーポレーションに運ばれた“ふたり”の怪我は酷いものだった。

ラディッツが宇宙船ごと連れてきたのはおそらく5歳くらいの少女。

生命維持装置でぎりぎり命をつなぎとめているほどの重態だった。

だが、もうひとりであるベジータが悟空を使って連れてきた少年も同じことで、むしろ何故今まで動いていたのか不思議なレベルだ。

医師の手配などを任されたブルマは、あまりの惨状に悲鳴じみた文句を言いながらもばたばたと様々な手配をする。

普段ならば仙豆や神に依頼して回復させるのだが（傍から聞いたら大分異常な選択肢だ）、今はとことんタイミングが悪い。

デンデは前回の戦いの教訓から、自身の龍族としての能力強化のために実家（ナメック星）に戻っているし、仙豆は植えたばかりでまだしばらく実が出来ない。

ふたりの重傷者は地球の一般医療によつて治療されることになったのだ。

綺麗に清拭されたふたりの顔はところどころに痣があるものの、その整った造形を損なうものではなかった。

お人形のような、とても表現すれば良いのだろうか。

着飾ればさぞ見栄えするだろうと予想できるふたりだが、それゆえに青い顔をして傷の痛みに呻いている様は痛々しい。

彼らがなんなのかについて、ベジータやラディッツは語らなかつた。

ただ、説明されずともある程度は予想がつく。

彼らにはかつてベジータや悟空にもあったしっぽが生えているのだ。
だ。

サイヤ人の血をひいているのは間違いない。

だが、惑星ベジータが滅んだのはもう30年以上前。
彼らが生き残りであるのは考えづらいので、おそらく彼らの親がそ
うなのだろう。

呼び出された医師達が入院を勧める中、ベジータがそれを断り追
返した。

そして、誰が決めたわけでもなく、ふたりの子供の看護はラディツ
ツが担当し、ベジータはかなり頻繁に病室に顔を出している。

何人かは見舞いの際ベジータ達にこの子供達の仔細を尋ねたが、
「起きたら話す」とだけしか返されない。

その様子があまりにも取り付く島もないため、結局子供達の回復を
待つこととなった。

事態が動いたのは二日後。

サイヤ人ゆえの凄まじい生命力で峠は越えていたふたりのうちの
ひとり少年が意識を取り戻した。

元々子供達を心配して、地球の戦士のほとんどはCCに滞在してい
たため、すぐに病室に集まる。

目覚めた少年は最初かなり混乱したようだった。

隣のベッドで寝かされた少女を確認して多少は落ち着いたようだ
が、それでも忙しく視線を動かして状況把握に努めている。

「ちよつと。少し落ち着きなさい！あんただんだけひどい怪我だと
思ってるの!？」

少年は大声を出したブルマを驚いたように見やったあたりでベ
ジータが声をかけた。

「■■■■。」

「■■■■■■■■■■e?。」

「こちらの言葉で話せ。俺に全部説明させるつもりか」

少年はハツとした顔になった。

「!・・・申し訳ございません」

そして慌ててベッドから降りようとしたが、それもベジータが制止
する。

「そのまま構わん」

「か・・・かしこまりました」

「ちよつとベジータ」

怪我をした子供に対してあまりな態度ではないかと咎めたが、少年は再び戸惑った顔でベジータを見る。

するとサイヤの王子は作りこそ小さいが逞しい肩を竦めて

「・・・妻だ」

とブルマを紹介した。

その言葉に少年の顔が明るくなる。

「左様でございましたか」

「それよりだ。まず問おう。お前はどこの誰だ」

「・・・」

言われて少年は居住まいを正し、頭を丁寧に下げた。

「お初にお目にかかります。僕の名前はベジータ。ベジータジュニア。第二惑星ベジータ国王代理、王女カロンの子です」

「つまり俺の甥だな」

衝撃的な告白に、王子は淡々と補足した。

ジュニアと名乗った少年は、視界の端にいる眠れる少女を痛ましげに視線を送る。

「そちらにいるのが僕の妹のミューゼ。五歳です。僕はもうすぐ10になります」

「・・・あいつは息災か？」

何故か問うのを躊躇した叔父に、同じ名前の甥は怪我に響きそうなほどの勢いで頷く。

「はい！息災にございます！ああ、叔父上がご存命とわかれば母はどれだけ喜ぶか！母は今でも叔父上を深く尊敬しております！僕の名もかつてなくした母星や英傑からではなく、叔父上からいただいたものです！第二惑星ベジータが成った後も王位を引き継ぐのを拒んでいるのも、兄上から篡奪するようで嫌だと思っているからで

「落ち着け」

「あ、も、申し訳ございません」

再び頭を下げる。

その段階であまりの事実硬直していた周囲が動き出した。

「え、親戚の子？ていうか、あんた妹いたの!？」

「じゃあ、俺の従兄なの!？」

「え、ベジータの子じゃないんか？」

ベジータはブルマやトランクスの問いには答えず、失礼なことをのたまうライバルに無言でローキックをかます。

「いてっ!!怒るなよ、ベジータ。だってそいつおめえにそっくりじゃねえか」

「え、僕、叔父上に似ておりますか？」

似ていると言われた少年はとても嬉しそうに血の気のない頬を赤らめた。

周囲の感想としては髪と目の色以外の容姿的共通点が見当たらないが、確かに空気というか、雰囲気というか身にまとうものが似ているように感じる。

甥はまだ照れていたが、すぐに再び背筋を伸ばした。

「え、えと。まず何から話せばいいでしょう」

「そうだな。まず、お前が言う第二惑星ベジータってなんだ？惑星ベジータはもう30年以上前にフリーザに消されたぜ？」

これを聞いたのはラディッツだ。

地球のサイヤ人で唯一残しているしっぽを振ってみせると、少年の顔が目に見えて輝く。

「第二惑星ベジータは僕の母が建国した星国家です。国民の約3分の2はサイヤ人で、残りは他の戦闘民族です。僕達はそこからきました」

「!?待て。他にサイヤ人がいるのか」

「左様でございませ、叔父上」

ジュニアが言うには、ベジータとカロンの母親Ⅱ王妃パプリカは惑星ベジータが滅ぼされるかなり前からフリーザの目を盗んで、遠く離れた辺境の星に移民を繰り返していた。

彼女は自分達の今の戦力ではフリーザに勝てないことを理解して

おり、血を絶やさぬための行動である。

戦鬪のどさくさに紛れて死んだことにしたり、処刑したことにしたりして、時間をかけてかなりの人数を逃がしていたのだ。

隠れ住んだサイヤ人達は人工子宮なども併用して人口を爆発的に増やしていった。

母星が滅ぼされてしまったことは、フリーザ軍の通信を盗聴するなどして知ったが、彼らは時期尚早として打って出ることはなかった。

当時サイヤ人の中で最強と謳われていた王Ⅱザラートやエリート達が相手にもならなかったことがわかったためだ。

それを弱腰と詰る意見もかなりあったようだが、力の差は認めざるを得ず力を蓄えることになった。

「母星が滅んでから何年もして、僕の母Ⅱカロンの殺されたという情報が入って来たそうです。それでせめて遺体だけでも回収できないかということだ」

「その後あの星に行つて瀕死のカロンを発見したと」

「はい」

叔父が引き取った言葉に首肯する。

ベジータは何か腑に落ちない様子だったが、甥の言葉を遮るつもりはないらしく先を促した。

「治療を受けた母は一族をまとめ上げ、他の戦鬪民族にも声をかけて、今の星Ⅱ第二惑星ベジータを星国家としたのです」

そこでジュニアはにっこりと子供らしく笑つて、ベジータに寿ぐ。

「お喜びください、叔父上。母は成し遂げたのです！我が一族の再興を成し遂げたのです！」

「………そうか」

ベジータはいつも通りの仏頂面でいつそ素っ気なく聞こえる返事をした。

あまりな態度にジュニアが表情を曇らせると、悟空が不思議そうに首を傾げる。

「どうしたんだよ、ベジータ。妹とか、仲間生きてたんだろ？嬉しくないんか？」

「……何故いちいち喜ばねばならん」

そこで悟空やブルマは気付く。

「どうやらベジータはこういう表情をしていいか迷っていたらしい。嬉しくないというわけではないのだろう。」

しかし、どう喜べば良いかわからないようだ。

その様子を見てとったラディッツは、おろおろしているジュニアの髪を撫でてやった。

「ああ、気にするな。お前の叔父さんはちよつと不器用なんだよ。まあ、星の詳細はまた今度聞くとして、お前らなんで大怪我して地球に来たんだ？」

そう、本題はそれである。

ほとんど死滅した一族がまだ多く生き残っていることは衝撃だったが、それよりジュニアとミューゼは何故ここまでの重傷を負って地球にやってきたのか。

その問いにジュニアは一瞬目を泳がせ、まだまだ薄い胸板にめり込ませるようにして項垂れる。

「……実は地球にサイヤ人の生き残りがいるってことは前から知っていたので、妹と遊びにきたんですが、途中でお土産を買おうとした星で襲撃にあって」

「あいつらはなんだ？ベジータは傭兵だと言っていたが」

「わかりません。というより心当たりがあり過ぎて誰が雇ったかわからないんです。まあ、誰だろうと選択肢はひとつですが」

ピッコロの疑問にジュニアはニヤリと不敵に口角を釣り上げる。

「僕は生き延びてやりました。あとはやり返しておしまいです」

その表情にヤムチャ、クリリンや悟飯、ピッコロがはっとする。

かつてベジータが地球に襲来した時見せた表情と瓜二つだったからだ。

当時の恐怖を思い出したのか、クリリンの顔色が微妙に悪い。

悟空はどこか懐かしそうに目を細めている。

ジュニアはすぐに笑顔を柔らかいそれに変えて、丁寧に頭を下げた。

「叔父上。叔母上。そして皆さん。ご迷惑をおかけして申し訳ございません。助けてくださってありがとうございます」

「いいのいいの。気にしないで。あんたみたいな小さい子がそんなに気を使わなくても良いのよ？あんたのおじさんなんてこっちが心配しても勝手にトレーニング始めちゃうし、お礼も言わないしだったんだから」

「……………」

ブルマのからつとした言葉にベジータは鼻を鳴らし、ジュニアは反応に困った様子で視線を彷徨わせている。

すると悟飯が気づかわし気に少年と未だ意識が戻らない幼女を見比べた。

「君はこれからどうするつもりなんだい？」

「……………」と。とりあえず通信機で母星に一報を入れてから、帰ろうかと。一度戻って出直して参ります。お礼もその時改めて……………申し訳ないのですが、妹は意識が戻るまで置いていただけませんか？必ず迎えに参りますので」

「おいおい。お前大怪我してるんだぞ？妹も意識不明だし。隣にいてやれよ。もちろんお前も治るまでいればいい」

「何か急いで帰らないといけない用でもあるのか？」

ヤムチャとラディッツの言葉に、ジュニアは再び言いづらそうに口を開く。

「いや……………あの。実は皆に何も言わずに勢いで出てきてしまったので……………早く帰らないと怒られる」

「大怪我した状態で帰る方が怒られるわよ！あんた親戚なんだから遠慮しないの！それにあんたの宇宙船航行機能壊れてたし！ラボにあるから、明日朝一でどれくらいで直るか調べてあげるから今日はもう寝なさい！」

ブルマはそうきつぱり命じると、初めての親戚にはしゃぐトランクスや『元気になったら一緒に遊ぼうね！』と手を振る悟天を部屋の外に出し、他の面々もそれに続く。

ベジータもそれに素直にならうが、一瞬甥に目を向ける。

ジュニアは出ていく人々を見ず、どこか悲しそうに眠る妹を見つめていた。

ジュニアは真夜中にそつと病室を抜け出した。

そして慎重に気配を消して、ラボを探し出し、そこに置かれた一人用ポットを慣れた手つきで操作する。

するとポットから光が照射され、ノイズ混じりの映像が浮かび上がった。

ジュニアはイライラした様子で何度も操作を重ねる。

しばらく経った後、ようやく映像に人が映りこんだ。

『ジュニアか!? てめえ今どこにいやがる!?!』

現れたのは褐色肌の、がっしりとした体格の青年だ。

全体の造形は地球人と変わらないが、目が違う。

白目にあたる部分が漆黒で、逆に虹彩は白い。

全体的に整った顔立ちだったが、顔には殴打痕があり、厚めの口元は切れていた。

青年は荒い語調とは裏腹に、ジュニアの痣だらけの顔を見てはつきりと安心したような表情をする。

それはジュニアも同じで、青年を見てやや落ち着いたようだった。

「地球だ。何故いるかはわからん。気付いたらポットに詰め込まれていたんだ。ミュウもいるが今は意識がない」

『姫様もいるのか。良かった。生きてただけ儲けもんだ。正直生きてると思わなかった。さすがあの女のガキだ。運もあるな』

「当たり前だ。皇太子である僕があ程度の程度で死ぬものか。ミュウもそうだ。……おそらくもう少しで目を覚ます。……そちらの状況は?」

『なかなかひどいことになってるが、どうってことねえさ。あのくそ野郎は倒したぜ? 事後処理は忙しくなるが、あの女が帰ってきたらどうにでもなるだろう。てめえらはそっちでゆっくり養生しろ。戦闘力が低い奴がほとんどで、重力も弱い星なんだろう? 確か生き残りの純血サイヤ人もいるって話だしな』

「……………」

軽い口調で休息を勧めてくる青年に、ジュニアは幼い麗貌を険しくする。

「……………僕に戦わせないつもりか、ウルス」

『なんのことだよ?』

「とぼけるな。まだ、倒せてないんだろう!?僕も戦う!」

『おい、話聞いてなかったのかよ?あの野郎は倒したんだぜ?』

「なら聞くが、誰がどうやって倒した?母様はまだ帰ってきてないんだろう!?あいつを倒せる奴が母様以外いるわけないだろうが!」

『マザコンかよ』

「違う!我らの中で一番強いのは母様なのはわかりきった話だ!それともお前が倒したとでも言うつもりか!」

『……………信用ねえな』

「しっかりと観察していると見え。お前が僕達を気遣ってここに残るように言っていることも、あいつが母様以外倒せそうにないのもわかっているだけだ」

『それだけわかっているなら、半死人のお前が戻って来たところで邪魔なだけだってわかるだろう』

「サイヤ人の回復力と死の淵から戻って来た後のパワーアップなめるなよ。このまま平和な星でぬくぬくしているのなんてごめんだ」

『駄目だ。絶対帰ってくるな』

「ウルス!!」

『てめえ普段自分はガキじゃねえって言うてるくせになんでそんなに聞き分けないんだよ!てめえは皇太子だろうが!王位継ぐんだろ!』
その言葉にジュニアはぐつと言葉に詰まる。

ウルスと呼ばれた青年はため息をついた後、まるできかんぼうの弟を宥めるように笑った。

『安心しろ、ジュニア。別に俺が唯一の生き残りってわけじゃねえ。』

S級以上の奴らは全員生きてるんだ』

「……………」

『まあ、無傷ってわけじゃねえ。だが、どうにでもしてみせるさ』

「……………」

『納得いかねえって面だな。だが納得してもらわないと困る。じゃあな』

「おいー!」

ジュニアが引き留める声を発する前に通信が切れる。

後には深夜のラボの静寂が舞い降りた。

ジュニアは血色の悪い顔をさらに白くして、なんとか再度通信を試みようとする。

だが、返ってくるのはノイズだけだ。

まだ10にもならない王族は、手で顔を覆い呻く。

彼自身にもわかつている。

今の自分は足手まといにしかならない。

それと同時に移動中に粗方回復するという考えも浮かぶ。

逃げるのは絶対に嫌だ。

だが自分は王家の血筋を守る義務がある。

でも仲間を見捨てたくない。

絶対に見捨てたくない。

そんなことをしたら背後に連なる英傑達に顔向け出来ない。

戦ったと胸を張れない。

どうすれば良いのだろうと悩んでいると、唐突に背後に気配が生まれた。

驚いて振り返れば、叔父が戸口に寄りかかっている。

「え、……あ……叔父上!」

とつさに何かを言おうとしたが、結局意味のあることをまとめきれずもごもごと口を動かすだけになった。

ベジータはそんな甥に逞しい肩を竦め、低く命じる。

「次は正直に話せ!」

ジュニアはその静かな言葉に怒鳴られたかのように悄然と小さく頷いた。